

# 焼物職人の誕生—タイ東北部農村地域の事例から

中 村 真里絵<sup>1</sup>

## 1. はじめに

タイ東北部の都市コラートの市街地を抜けて、幹線道路沿いを南下すると、キャッサバや稲の農耕地が広がるなか、突如として焼物を販売する大小の店が軒を連ねる一帯が現れる。この辺りは、タイ人の間で焼物産地ダーン・クウィアンとして広く知られている。筆者は2006年以降、当該地域において、焼物づくりを生業として捉え、その産地形成と人びとの社会関係の再編について民族誌調査を実施してきた。

タイ農村地域の生業に関わる民族誌として、農業を中心とした農民の生活世界をえがく民族誌(Sharp *et al.* 1978, Potter 1976)の蓄積がある一方で、非農業にかかわる民族誌の蓄積は少なかった。それは、農村地域の人びとの生業が農業であり、焼物づくり等の非農業は農業の片手間に副業として営まれるもので、その重要度が低かったからだといえる。

本稿で取り扱うダーン・クウィアンにおいても、人びとの生業は長らく稲作を中心とする農業で、焼物づくりは農繁期以外の乾季に従事する季節的副業としての位置づけであった。しかし現在、彼らは農業をやめて焼物づくりに専念している。ダーン・クウィアンの焼物づくりは、農閑期に営まれていた副業が、1970年代以降のタイの社会変化において活性化した事例である。

従来、ダーン・クウィアンでつくられていた水甕や貯蔵用の甕などの日用品は、艶やかな黒色をした焼締陶であった。しかし近年では、焼成温度を下げて赤い素焼きの土器にすることが多く、作る製品も多様化しているため、本稿ではこれらを総称して「焼物」と呼ぶことにする。

東南アジア大陸部における焼物づくりに関する先行研究として、コートやレファーツ、植崎らによる共同研究があげられる(コート他 2000)。彼らは1993年から1999年にかけて、東南アジア大陸部、特にタイ東北部を中心に、焼物づくりに関する広域調査をおこなった。

この調査報告書によると、東北部において焼物(焼締陶および土器)づくりを営む村は79か所を数えていた(コート他 2000)。しかし急速な経済発展にともなう村落生活の変化により、多くの焼物づくりは消滅あるいは衰退へと向かっている。衰退の主な理由として、代替品となる工業製品の流入により日用品としての焼物の需要が大幅に減ったことや、若者の都市への流出にともない後継者がいなくなったことが挙げられる(中村 2013)。

しかし、必ずしも全ての焼物づくりが衰退へと向かったわけではない。ダーン・クウィアンは、室内や屋外の装飾品や近隣の観光地の土産物を生産することで、焼物づくりが盛んになった。社会学者コーエンは、このダーン・クウィアンの焼物を「商業化した手工芸品(Commercialized Craft)」の

---

<sup>1</sup> 国立民族学博物館外来研究員

一つとして捉え、周辺地域が観光化するなかで発展してきたと論じている (Cohen 1993, 2000)。コーエンは手工芸品を、地域を超えた市場経済化の文脈に位置づけて考察しているものの、村人がどのようにこうした動向に取り込まれていったのか、そのプロセスについては踏み込んでいない。一方で、手工芸品を取り上げた文化人類学研究では、手工芸品生産を国際市場において捉えなおすのみではなく、村人たちが再編された生産体制のもとでいかに手工芸品づくりを継続しているのかを解き明かしている (大西 2003、後藤 2001、Nash 1993)。

本稿では、これら文化人類学の先行研究に習い、焼物づくりが急速な社会変化にともなういかに活性化したのかを、その社会背景とともに明らかにし、村人がそれらの状況にいかに適応したのかを示す。その上で、かつて焼物づくりが農業の副業であったことに立ち返り、考察を加えたい。

## 2. 調査地の概要

### (1) 調査地の概要

東南アジア大陸部に位置するタイは、地理的特徴から北部、東北部、中部、南部の四つの地域に分かれる (図1)。コラート高原に広がる東北部は「イサーン」と呼ばれ、全国土面積のおよそ三分の



図1 タイの地図

一を占める。ラテライト状の痩せた土壌が広がる東北部の農業生産率は低く、人びとの所得も低いことから、貧困地域とみなされてきた（倉島 2007：39-44）。こうした地理的、経済的状況は、東北部に住む人びとの移動や生業のあり方と深くかかわってきた。

東北部に住む人びとは伝統的に稲作を生業とする農民であり、自給自足的な生活を営んできた（チャティップ 1987：93-106）。彼らは米の収穫ができなくなると、より多くの収穫が可能な土地を求め、新たに居住する土地を探して移住する「良田探し」を繰り返した（林 2000：87-92、福井 1988：195-196）。こうした移動は、地域によって差はあるものの1950年代までおこなわれていたところもある。また、1960年代には、バンコク一極集中型経済の弊害で広がったバンコクと地方との収入格差のため、若者が工場労働や建設業などの出稼ぎ労働者として最も流出したのが東北部である（山田 1999：16-17）。

本稿で取り扱う焼物産地ダーン・クウィアンは、東北部の通称「コラート」と呼ばれるナコンラーチャシーマー県に位置する。コラートは「東北タイの玄関口」としてバンコクと東北部とを結ぶ交通の要衝として栄えてきた。北をラオス、南をラオスに挟まれた東北部は、北部にはラオ系、南部にはクメール系の人びとが住み、その中間にあたるコラートは文化的緩衝地だといえる。

タイ人の間でも焼物産地としてその名を広く知られている「ダーン・クウィアン」は行政区（タンボン）の名称でもあり、本稿で取り上げる事例の主なデータは、この行政区を構成する一つの村、C村における調査のものである（図2）。

C村の世帯数181戸、人口743人、うち男性341人、女性367人である。C村は焼物販売店の密集し



図2 調査地周辺（Google map より筆者作成）

た場所（A）からおよそ2 km 離れている。C村はダーン・クウィアンのなかでも最も焼物づくりにかかわっている世帯の割合が高く、8割近くの世帯が焼物づくりに携わっている。C村に工房は38軒あり、窯は28基あった。村外から働きに来る者も含めて、成形職人は49名、彫刻職人は58名いた。成形職人は全員が男性であり、彫刻職人はうち約40人が女性であった（2006年の調査時）。また、焼物づくりと農業とを兼業しているのは一親族のみであった<sup>1</sup>。

## （2）焼物づくりの製作工程

図3は1970年代後半までのダーン・クウィアンの焼物づくりと、現在の焼物づくりの製作工程を示したものである。焼物づくりの製作工程は、かつても現在も原料の採取、素地づくり、成形、乾燥、焼成という基本的な作業は変わらない。しかし、現在では屋内外の装飾用の焼物をつくるようになっており、乾燥後に模様を付ける彫刻作業や焼成後に彩色をする作業が加わっている（写真1参照）。

以下に、現在の製作工程について、簡単に述べていく。

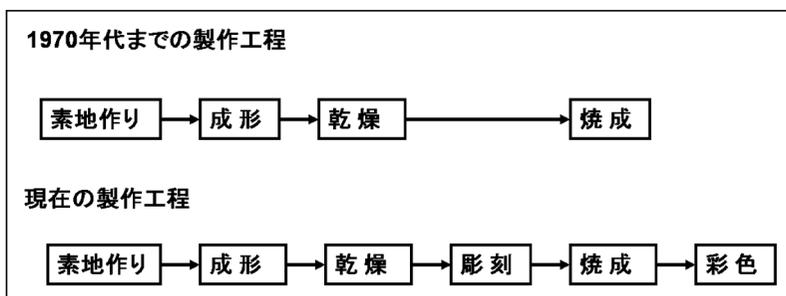


図3 1970年代と現在の製作工程の比較



写真1 彫刻と彩色を施した焼物

<sup>1</sup> ここでは、親族を隣接する土地に居住する血縁もしくは姻戚関係にある者たちとして捉えている。現在のC村で、こうした関係性は3世代にわたって見られる。この親族は所有する農耕地において、稲作を協力しあっておこなっている。

まず原材料となる土と砂は、メコン川支流のムーン川近辺から採取する。粘土と砂を採取するのは、稲作をしない農閑期と、土地が乾燥している乾季に限られている。

続く素地づくりは、深さ 70 cm ほど掘った池に、粘土と砂をおよそ二対一の割合で混ぜ入れ、水を浸して一晩寝かせておく。次の日に、なじんだ粘土と砂を手で混ぜ丸め、土煉機を使って細かくする。

従来の成形は、二人一組でおこなう紐づくりの技法を用いていた。約20年前に電動ろくろを用いた水挽きの技法が入ってきたことにより、大きいサイズの焼物は紐づくり成形で、小さいサイズの焼物は水挽き成形でつくられるようになった<sup>2</sup>。

成形した焼物を屋根のある工房内で乾燥させながら、焼成まで適度な水気を保つようにする。

模様付けは、適度に乾燥した表面を彫って描きだす。彫刻模様は、花や魚の絵、幾何学模様など多様なバリエーションがあり、流行にも左右される。この彫刻作業は1980年頃に加わった工程である。

焼成は、燃料に薪をつかっておこなわれる。かつては森や農耕地にあるシロアリの塚を掘ってつくった窯を使用していた。1980年頃から徐々に集落の屋敷地内に建てた日干しレンガ製の半地下式の穴窯で焼成をするようになった。

彩色をするようになったのは1990年代になってからである。素焼きの表面をヤスリで滑らかにし、刷毛で化学塗料を塗るか、エアースプレーで吹きつける等、様々な手法が使われている。

以上の製作工程において、現在では工程ごとに分業がすすんでおり、ほとんどの場合、それぞれ従事する人が異なっている。そのなかで、職人を意味する「チャン」とみなされるのは成形作業と彫刻作業に従事する人のみである。その他、「粘土を掘る人」、「粘土をつくる人」、「焼成する人」、「彩色する人」というような呼び方をする。

### (3) 焼物づくりにおける「職人」

このチャンという用語は日本語では「職人」と訳されるが、日本語と必ずしも同義ではない（富田 1997 : 450）。「チャン」は何かしらの技能を持っている人のことを指し、タイにおいては機械の修理工なども同じくチャンと呼ばれている（森田 2007 : 498-499）。焼物づくりにおいて成形と彫刻の作業のみにチャンが用いられるのは、これらが誰にでもできるものではなく、技能を習得するのにある程度の訓練や経験が必要だとみなされていることがわかる。

チャンには様々な用法がある。例えば、これに「成形する」という動詞を意味する「パン」をつけると成形職人を意味し、「彫刻する」という動詞を意味する「ケ」をつけると彫刻職人となる。

チャンに個人名を付ける使われ方もある。例えば、名前をスートという職人がいた場合、彼を呼ぶ際に「チャン・スート」、つまり「スート職人」と呼ぶこともある。これは、「〇〇さん」と言ったような敬称に近い使われ方で、その人に直接呼び掛ける時やその場になくともその人を言及する際にも使うことができる。

また、同じデザインかつサイズの焼物を速く大量につくるのではなく、時間をかけて精巧な彫刻を

---

<sup>2</sup> 複数の成形技法が併存する状況の分析については、中村（2008）に詳述している。

ほどこした焼物をつくる職人のことを、「美術」を意味する「シラパ」をつけて、美術（系の）職人ともいう。あるいは、粘土製の人形のみを特化して作っている者を、「人形」を意味する名詞、「トゥカター」をつけて人形職人と呼ぶこともある。

さらに、その職人の出身地やエスニシティと結びつき「チャン・カメーン」という言葉を用いる場合もある。カメーンとは、タイ語でカンボジアやクメールを意味し、ここでは東北部のなかでもカンボジアに近い地域を指す他、クメール系という民族性をも意味する。ダーン・クウィアンには、カンボジアと国境を接するシーサケット県から働きにやってくる職人が多く、地元の人びとは彼らのことを総称して「クメール系の職人」と呼ぶ。それに対し、地元出身の職人を「ダーン・クウィアンの職人」と呼ぶ。

このようにチャンは状況に応じて、作業名やエスニシティ、個人名とともに使われる。例えば、スート職人はクメール系の職人で、成形職人でもある、というような一人で行くつもの呼び方をされることになる<sup>3</sup>。この「職人」の概念についての検討は、その社会におけるモノづくりの位置づけを理解する助けとなるが、それについては今後の課題とし、本稿では、特定の作業にかかわらず焼物づくりのみに従事する人全般を「焼物職人」と広く捉える。次項では、この焼物づくりに従事する者たちがどのように生まれたのか、その誕生の背景を明らかにしたい。

### 3. 焼成窯の変容

#### (1) 副業時代におけるアリ塚の窯の利用

副業時代と現在の焼物づくりの最大の違いに、作る場所の違いがある。1970年代、村人は農耕地や森のなかで焼物づくりをしていた。土地の所有者の有無を気にせず、農耕地や森にあるシロアリの塚を掘って、焼成に利用していた。村人によると、アリ塚の窯は、黒褐色の焼締陶を焼きあげるのに必要な1,000度以上もの高温が出たという。このアリ塚の窯は雨期になると水没してしまい、焼成できなくなったため、焼物づくりは必然的に農閑期と乾期の作業に限られていた。

このアリ塚の窯の周りに、血縁や隣人関係にある人びとが3~4つの茅葺の簡易小屋をつくって、小屋ごとに焼物づくりの作業にあっていた。各小屋では、多くの場合が夫婦関係、その他キョウダイ、親子関係にある者が、2人ずつの組になって作業にあたり、焼成までの全ての作業を担っていた。しかし、これらの複数の小屋は窯を共有する関係にあり、窯をつくるときに男性のみがアリ塚を掘り、焼成作業の際には泊まり込みで協力して作業にあっていた。

このようかつてはアリ塚の窯を中心としたユニット単位で焼物づくりをしていた。このアリ塚の窯を中心とした焼物づくりは、2013年にラオスの地方都市パクセー近郊において、かつて焼締陶づくりがおこなわれていた3つの村落で聞き取り調査を実施した際にも、同じ形態をとっていたことがわかっている。

出来上がった焼物を、男性たちは牛車に数十個と積み、数台で隊列を組んでスリン県、プリラム県

<sup>3</sup> 森田は、このチャンという用語のわかりにくさについて、「一見、職人のような「職業」のひとつを指すように見えるのにもかかわらず、その用法が微妙に異なっているからだ」と説明し、職業を意味する「アチーブ」との食い違いを指摘している（森田 2007：498-499）。

といった他県にまで足を運び、焼物と、米やトウガラシ、塩を交換するかお金で売っていた。この物々交換は、不作時の米不足や食料不足を補うのに役立っていたというように、余剰を交換し、不足分を補う側面があった。村人たちは例年であれば農閑期に数回牛車で出かけていたのが、豊作の年には売りに行くのを1回に減らすなど、焼物づくりは常に稲作の収量に左右されていた。

60歳代以上の村人は、当時の経済状態について、生きていけないほどの貧困ではなかったが、やはり貧しかったと言及していた。こうした、稲作の収量の少なさを補うものが焼物づくりであったのである。

隣村では焼物づくりをする者がいないことについて、その理由を村人にたずねると、隣村の人びとは高いところに広い農耕地を持っている人が多く、水害に遭いにくく安定した稲作をすることができたため、焼物づくりをする必要がなかったと説明していた。このことから、当時のダーン・クウィアンの人びとにとって、農業が本業であり、焼物づくりはその収量不足を補うための副業であったことがわかる。

しかし、このアリ塚の窯を中心とした焼物づくりは、農耕地の開発が急速に進んだ1960年代以降、焼成に利用していたアリ塚が壊され、その数が減少していったため、継続するのが難しくなっていた。同時に、村人の土地の所有意識が高まり、これまでのように土地所有者が誰であるかを気にせずにはアリ塚を窯として利用することに、抵抗感も芽生えていった。そのままいけば、焼物づくりの存続は難しい状態であったが、こうしたアリ塚の窯の問題を解消したのがレンガ窯という新たな技術の導入である。

## (2) レンガ窯の導入

このレンガ窯をダーン・クウィアンに持ち込んだのは、コラートで職業訓練学校の美術教師をし、村人たちから「P先生」と呼ばれていた人物である。P先生は大学卒業後、東北部のウボンラーチャーシーマー県の地方公務員となり開発局で数年働いた。その後、1968年から2年間、ユネスコの派遣により日本の愛知県瀬戸市の陶磁器センターへ研修する機会に恵まれ、焼物全般に関する知識を得た。帰国後はコラートの職業訓練学校の美術教師として着任した。教師時代からダーン・クウィアンの焼物に関心を持ち、毎週末に泊まりがけで村へ通い、村人との交流を深めた。

P先生は教師を引退した後、幹線道路沿いに工房と店をつくり、村の職人を数人誘って一緒に焼物づくりを始めた。このP先生がダーン・クウィアンに持ってきた焼成窯の技術は、研修期間に瀬戸で得た知識からくるものである。地面を半地下に掘って周りに日干しレンガを積み上げて、天井を丸く半球状にする。窯に用いるレンガは、素地づくりの砂と同じものを日干ししたものである。

新たな窯の導入によって、シロアリの塚の減少や、他人の土地を使うことへの抵抗感の芽生えといった焼物づくりの維持に困難だった問題が、解消されることになった。これまでの焼成作業はアリ塚のある農耕地や森に限定されていたが、新しいレンガ窯はつくる場所を選ぶことができた。

村人たちが窯を集落内部の屋敷地の土地に設置することにより、焼物づくりの場が農耕地から集落内部へと移動した。集落は低い農耕地に比べ比較的に高い場所にあるため洪水になりにくく、雨季でも窯が水没しないため、村人たちは通年使用できる焼物づくりの環境を得ることになった。

## 4. 活性化する焼物づくり

### (1) 日用品から装飾品へ

現在、ダーン・クウィアンでつくられている焼物は、そのほとんどが屋内や屋外で使われる装飾用である。花瓶、壺、複数のパーツとポンプを組み合わせた噴水など、素焼きのままの物もあればカラフルな物もある。これらは、かつてつくられていた模様のないシンプルな黒褐色の焼物とは大きく異なっている。日用品の焼物が、装飾品への焼物へと転換を遂げたのは、1970年代のことであり、これにはタイの民主化運動が間接的に関わっている。

1970年代当時のバンコクを中心とする民主化の波は地方都市へも波及し、コラートの市街地でも例外ではなかった。市街地にあるナコンラーチャシーマー師範学校やナコンラーチャシーマー職業訓練学校の学生達も組織化していった。こうした運動を推進する学生達は政府の弾圧を逃れるため、市街地から森へと逃れていった。コラート市街地の学生たちがダーン・クウィアンへとやってきたのも1970年代後半であった。

この時やってきた学生のなかには、焼物づくりに関心を示す者もいた。その中の一人、Tという女性は、大学生だったとき姉と一緒に学生運動に加わり、ダーン・クウィアンにやってきた。その後、ほとんどの学生たちが街の生活へと戻るなか、彼女は「村のすばらしい自然とともに生活を続けたい」と思い、街へは戻らず村に残ることにした。この時、両親に幹線道路沿いの土地を購入してもらい、姉とともに焼物販売店と工房の経営を始め、現在ではダーン・クウィアンの数ある店のなかでも老舗店となっている。

彼女が学生時代に、仲間とともに村に滞在していた際、遊び心から、職人がつくった焼物の表面に花などの簡単な模様を彫り始めた。村人がこれらの焼物を売りに行くとき付加価値が付き通常の値段よりも高く売れた。彫刻による模様付けは村人たちの関心をひきつけ、次第に彼らの間に広まっていき、線状の模様しかなかった焼物は、装飾性のある焼物へと変貌していったのである。

Tのような元学生や知識人は、販路を拡大するにあたって大きな役割を果たしていた。バンコクの業者とのやり取りの窓口となっていったのである。これら販売店は、当初、学生運動後に定住したT姉妹やP先生の店を含む3軒余りであった。

主にバンコクの輸出業者から数百から数千個という大口のオーダーを受け、集落の工房に定期的に注文をおろすようになり、1980年代前半には、集落内の工房は幹線道路沿いの販売店からの受注によって焼物をつくるようになっていった。ダーン・クウィアンの知名度が高くなるにつれて、完成道路沿いには、これら老舗の販売店だけではなく、小さな店舗も増え、現在では大小260店舗以上がひしめき合う状態になっている。これらの店舗は店主の采配で、集落内の工房に10個程度の小口から焼物を発注している。

以上のように、ダーン・クウィアンの焼物づくりは、副業時代とは異なる新たな市場と結び付き、地域内や近隣県内で使用されていた焼物は、タイ国内、そして国外へと流通していくことになった。

## (2) 若手職人の台頭

新しい市場を得て、安定した現金収入を見込めるようになった村人たちは、1980年頃から徐々に農業をやめて焼物づくりに専念するようになり、焼物づくりのみに従事する職人となっていった。

1997年のアジア通貨危機の影響など、景気の変動はあるものの、彼らは総じて順調に焼物づくりを継続してきたといえる。ダーン・クウィアンの名前が周知されるにつれて、客が直接、村内に購入しに来たり、注文にやっ来て来たりする機会が増加した。

現在、成形職人のなかには、月に20,000パーツ（1パーツ＝約3.6円、2015年3月現在）以上、稼ぐ者もあり、1日あたりの最低賃金である300パーツを考慮しても、高い水準なのが見える（厚生労働省 2014 : 28）。

しかし、これまで安定した焼物づくりを営んできた職人たちは、新たな時代を迎えつつある。2015年3月の調査では、多くの職人たちが、焼物づくりの将来に危機感を覚えているようであった。それは、職人が多くなりすぎたことと、製品があふれていることに関係している。他村からやってきて焼物づくりに従事する職人も増えており、今後は競争が激しくなっていくことが予想されていた。そうしたなかで、目立った活躍を見せる職人（33歳、男性）を紹介したい。

彼は若手の職人なかでも、紐作りの技法を用いて大きな水甕を丁寧につくる成形職人として、筆者も兼ねてから注目していた人物である。以前は、両親の工房で働いていたが、約6年前に結婚してから作業場が手狭になったこともあり、約3年前に自ら土地を購入し新たな工房を建て、現在の売れ筋である土製人形のみをつくるようになった（写真2）。近隣に住む知り合い10人を在宅で雇い、出来高制で人形の成形をしてもらっている。彼の妻は、幹線道路沿いに借りている店舗で、販売を担当している。彼は今こそが稼ぎ時だと考えており、毎日、休む間もなく働いている。昨年、トヨタのピックアップトラックの新車を購入する程の羽振りのよさであった。

彼のように、生産も販売も精力的にやろうとする職人はごくわずかである。多くの職人たちは、焼物づくりが飽和状態になりつつあることに危機感を覚えつつも、現在のように、ある程度の生活ができるだけの収入を望み、これまでと同じように注文に従って焼物づくりを続けることを望んでいる。しかし、これからのダーン・クウィアンの職人たちは、つくる技能だけでなく、販売する能力、市場



写真2 土製の人形

の流れを読む能力、つくる製品を変える決断力や新たな状況に対応する柔軟性などが求められていくのだろう。

## 5. おわりに

本稿では、ダーン・クウィアンの焼物づくりの転換を1970年代後半から1980年代前半と捉え、焼物づくりが活性化していく過程を、聞き取り調査によるデータから再構成した。ダーン・クウィアンの焼物づくりの活性化は、1960年代以降の農耕地の開拓の影響や、1970年代の民主化運動といったタイの国家的動向とかかわるなかで、知識人との交流がその契機となっていることが明らかになった。しかし、こうした知識人らとの出会いによってのみでは、焼物づくりの活性化を理解することはできない。

ここで今一度、かつては焼物づくりが農業の副業であったことに立ち返り、1960年代以降の東北部全体の経済的状況を概観しつつ考察を加えたい。

1960年代以降、タイの経済成長の波は東北部にもおしよせ、人びとを取り巻く生活環境を大きく変えていった。政府は、これまでの在来品種の稲作を中心とする農業ではなく、高収量品種の稲やキャッサバ、ケナフといった換金作物の導入を推奨した。それにより、農家の収入は1960年代から1970年代にかけて倍増した。この頃から消費型の経済が村人たちの生活に深く浸透した（重富 1995 : 185-189）。

1980年代末期以降の高度経済成長期には、都市部での就業機会が急増し、非農業労働に就く人が増加し、東北部からも多くの人びとが都市部へと出稼ぎに行くようになった。東北部において、1980年代前半までは農業が主要な現金収入源であったが、1980年代後半から1990年代初めにかけて、非農業の役割が重要になっていった。しかし、東北部の大部分の人にとっては、現金収入が出稼ぎ労働者からの仕送りに頼る割合が増加しても、仕送りが途絶えたときに生活を再生産するための手段として、放棄されることは少なかったという（北原 1990 : 433-434、木曾 2010 : 90）。

いうまでもなく、本稿で取り上げた焼物づくりは、以上の1960年代以降の東北部の社会変化と同時並行に生じたものである。特に1970年代以降、貨幣経済化がすすみ、より多くの現金収入が求められるなか、村人たちが農業をやめて焼物づくりに特化していったのは、焼物づくりが彼らにとってのよりよい収入源でもあったからに他ならない。副業時代とは異なり、一年中焼物づくりをすることが可能な環境と新たな市場の獲得といった条件が整い、安定した収入を見込むことができた。多くの東北部に住む人びとが、より多くの現金収入を望み換金作物栽培や出稼ぎ労働に従事するように、彼らは焼物づくりに従事したのである。焼物はダーン・クウィアンの人びとにとって換金作物の代替のようなものだったともいえる。

ここで注目したいのは、東北部の人びとの多くがいくら出稼ぎ労働によって収入を得ようとも、農業を放棄することはほとんどなかったという上述の指摘である。北原は、東北部に住む多くの人びとは、根強い故郷回帰の文化的伝統を持ち、出稼ぎに行っても農村での土地の相続の可能性がある、帰村する意思が強いと述べており（北原 1990 : 433-434）、彼らにとっての農業の重要性を経済的側面だけでなく精神的側面からも指摘している。

一方で、筆者が主に調査を実施したC村の人びとは農耕地を売ったり貸したりし、農業を放棄しており、職人を引退した後も農業に戻ることはない。このことは、東北部の人びとと農業の強い結び付きを考慮すると、大きな転換だったといえるだろう。

筆者は、ダーン・クウィアンの人びとは、知識人や元学生らとの交流から技術や新たな市場を得ることで焼物づくりに専念し、職人となったのだと理解してきた。しかし、農業を放棄したということに注目すると、別の側面が浮かび上がってくるのである。そこには、自給自足の生活に欠かせない在来品種を換金作物に切り替える決断のような、価値観の変容が含まれているのではないだろうか。それが具体的にどのようなものなのかは、職人がいかなるアイデンティティを形成しているのかといった問題、さらには本稿では用例の紹介にとどまったチャンという概念にも関わってくるだろう。これらの検討については今後の課題とし、本稿ではダーン・クウィアンにおいて、農業を放棄することによって焼物職人が誕生したと結論づけたい。

## 付記

本稿は、2013年に『物質文化研究』93号に発表した論稿「土器づくりの現在と専門化プロセス—タイ東北部土器生産地ダーン・クウィアンの事例から」をもとに、その後に実施した調査データと考察を加えたものである。本稿の調査の一部は、平成26年度 財団法人高梨学術奨励基金による研究助成を得て可能になった。

## 参考文献

ストンシー、ウィラサク

1986 『カラワン楽団の冒険：生きるための歌』（荘司和子訳）晶文社。

大西秀之

2003 「市場経済による“伝統工芸”の再生：ルソン島北部山地民の機織りを事例として」『南方文化』30: 85-107。

木曾恵子

2010 「東北タイ農村における女性の「出稼ぎ」と母役割：送り出し地域からみたグローバル化時代の移動の動態」『地域研究』10(2): 91-109。

小林正史、徳澤啓一、長友朋子、北野博司

2007 「北タイと東北タイの土器生産様式の違いを生み出した背景」『北陸学院短期大学紀要』第39号：219-328。

柿崎一郎

2007 『物語 タイの歴史近—微笑みの国の真実』中央公論新社。

北原 淳

1990 『タイ農村社会論』勁草書房。

2000 「タイにおける農村工業発展の可能性」、『経済科学』67-82、名古屋大学経済学部。

倉島孝行

2007 『タイの森林消失—1990年代の民主化と政治的メカニズム』明石書店。

コート、L. A.、檜崎彰一、レファーツ、H. L.

2000 「東南アジアにおける現代の土器および焼締陶の生産に関する地域調査」（佐藤サアラ訳）『勅瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要』8: 106-192。

厚生労働省

2014 『2014年 海外情勢報告』〈<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kaigai/15/>〉（2015年3月アクセス）。

後藤 明

2001 「フィリピン・ビサヤ地方における手工芸品生産—小規模経営組織に関する予備報告」『宮城女子学院大学人文社会科学論叢』10: 29-54。

重富真一

1995 「東北タイ農村における就業構造の展開—農村からみたタイ戦後経済史」、水野広祐編『東南アジア農村の就業構造』、163-210、アジア経済研究所。

高橋真一

1996 「タイ農村の人口・環境・経済—東北部農村を例として」『厚生省人口問題研究所研究資料』288号: 36-52、厚生省人口問題研究所。

チャティップ、ナートスパー

1987 『タイ村落経済史』（野中耕一・末廣昭 編訳）井村文化事業社。

富田竹二郎編

1997 『タイ日大辞典』めこん。

中村真里絵

2008 「土器生産地にみられる成形技法と社会的含意：タイ農村部ダーン・クウィアンの事例から」『タイ研究』第8号: 71-84。

2013 「土器づくりの現在と専門化プロセス—タイ東北部土器生産地ダーン・クウィアンの事例から」『物質文化』93号: 73-86。

2014 「ラオス国ルアンパバーン近郊における土器および焼締陶づくりの継承：パンルアン村とチャン村の事例から」『社会情報研究』12号: 67-76。

林 行夫

2000 『ラオ人社会の宗教と文化変容—東北タイの地域・宗教社会誌』、京都大学学術出版会。

福井捷朗

1988 『ドンデーン村—東北タイの農業生態—』創文社。

水野浩一

1981 『タイ農村の社会組織』 創文社。

森田敦郎

2007 「機械と社会集団の相互構成—タイにおける農業機械技術の発展と職業集団の形成」『文化人類学』71-4: 491-517。

Cohen, Erik

2000 *The Commercialized Crafts of Thailand: Hill tribes and Lowland Villages*, Honolulu: University of Hawaii Press.

Keyes, Charles F.

1967 *Isan: Regionalism in Northeastern Thailand. (Data Paper 65)*, Ithaca: Cornell University.

Nash, June (ed.)

1993 *Crafts in the World Market: The Impact of Global Exchange on Middle American Artisans*, New York: State University of New York Press.

Potter, J

1976 *Thai Peasant Social Structure*, Chicago: The University of Chicago Press.

Sharp, L. and L. M. Hanks

1978 *Bang Chan: Social History of Rural Community in Thailand*, Ithaca: Cornell University Press.